
マウンド。

青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マウンド。

【Nコード】

N1020A

【作者名】

青

【あらすじ】

汗と泥と涙の、高校野球に燃える高校生たちの青春物語。主人公は安藤祐咲アンドウチサ硬式野球部のたった一人のマナージャー。彼女はある日、かけがえのないものを失う。そしてまた、手に入れる。一度しかない青春を、一生懸命輝こうとしている高校生たちの物語。

第一話

今も時々思うよ。今ここに君がいたらどんなに良いだろうって

その朝、慎はいつもの様に走っていた。毎朝二キロのランニング。
それが彼の日課である。

そしてその慎にスポーツドリンクを渡すのが祐咲の日課だった。

一キロ地点で住宅の角を曲がる。

「まーこーと！」

張りのある祐咲の声が慎の耳に届いた。慎は、祐咲の姿を認めると
走るスピードを落とした。

はい、とドリンクを渡されるとスポーツ少年らしく爽やかに笑った。

「サンキュ。また後でな。」

いつも通りの言葉を交わし、慎はまた走り出した。

それが幼馴染の二人の日課だった。その朝までは。

慎が行ってしまうと、祐咲は家に戻り、朝食を食べた。その間に母親が弁当を用意し、机の上に置く。

食べ終わると、ブレザーの制服に袖を通し、髪をセットし、家の外へ出た。

いつもの様に家の前で待つ。一つ向こうの通りから、大きな部活用スポーツバッグを抱えた慎が現れるのを。

けれど、なかなか彼は現れない。祐咲が携帯電話を取り出し、時間を確認すると、七時二十分。あと二十分で校門が閉まってしまう。

「もう、遅刻しちゃうじゃん。」

慎が遅れてくるのはそんなに珍しいことではないため、祐咲が先に行くこともある。

けれど、大抵いつもギリギリまで待っている。それは、グローブを手にはボールを上へ投げながら歩く慎の姿を見るのが、好きだからだった。

それに、今日は何だか妙な胸騒ぎがする。もう行かなければ、遅刻してしまう。けれど、たまには良い。慎が来るまで待ってしよう。

来ないはずがないのだから、と。

三十分になっても慎は現れない。三十五分。どうして。祐咲の胸騒ぎはどんどん大きくなっていった。

通りの向こうを少し見てこよう、そう思って祐咲が歩き出そうとしたとき、玄関の扉が勢い良く開かれ、中から血相を変えた母親が飛び出してきた。

嫌な予感が、した。

「今、電話があって・・・慎君が・・・！」

第二話

結局、遅刻どころか三日間学校には行かなかった。いや、行けなかった。慎のいない学校へ、一人で行く気にはなれなかったのだ。慎が、死んだ。

「どうして・・・？」

三日間、その言葉しか出てこない。慎の母親から電話で、慎が交通事故で病院に運ばれたと聞いてすぐにその病院へ駆けつけた。

しかし、祐咲と母親が着いた頃にはもう遅かった。

ランニング中に、バイクと接触し、頭を打ちつけたらしい。打ち所が悪かったらしく、病院に運ばれてすぐに死亡が確認された。

頭を打っただけだから、身体は綺麗なままで、本当に眠っているだけの様だった。

右腕を庇うようにして、倒れていたそうだ。

どうして。理屈は分かっている。バイクとの接触事故。言葉にしてしまえばたったこれだけのことだ。けれど、違うのだ。祐咲のどうして、は。

「どうして慎が・・・どうして慎なの・・・？」

二人はいつも一緒だった。生まれたときから一緒に遊び、小学校も中学校も一緒に通った。

小学校で慎が野球を始め、どんどん上達していくのを見るのが嬉しかった。中学校では自然に野球部のマネージャーという位置についた。高校でも。

一年生エースという華やかな肩書きを背負った慎。何の苦労もなく手に入れたと。才能のある奴は、と。散々周りに言われたが、黙ってそれを受け入れた。

生意気だと、叩かれもした。

けれど部員は実力を見れば分かってくれる。毎日どれだけ慎が努力しているのか。

決して才能やセンスがあるわけじゃない。

野球が好きだから、必死で、上手くなりたくて頑張ってきたことを。それでも、野球を知らない人たちからのプレッシャーはとても大きなものだった。

そんな重責や精神的苦痛に耐えられず逃げ出しそうになったことは何度もあった。

そんな時、いつも慎を支えてきたのが祐咲だった。

恋人という関係ではなかったけれど、いつも二人で歩いてきた。

祐咲の隣にはいつも慎がいた。それが当たり前だった。そんな当たり前の日々が一瞬にして壊れてしまった。

もう、慎が投げている姿を見ることができない。一緒に学校へ行くことも、野球を見ることも、練習することも、できない。

その現実を受け入れることは、祐咲にとって余りにも過酷なことだった。

けれど、形だけでも立ち直らなければと、祐咲は思った。

『野球は一人じゃ出来ない。仲間がいて初めて成り立つんだ。』

慎の口癖だった。

祐咲は？野球部？のマネージャーだ。

慎のためだけにいるわけではない。部のために尽くし、働いてきた影の活躍者であるマネージャーは、決して日の目を見ることはないけれど、マネージャーがいなければ部が成り立っていかないことも祐咲はよく知っていた。

戻らなければ。慎がいなくても野球部は続いていく。

決して強豪とは言えない野球部のマネージャーは祐咲一人だ。

祐咲がいなければ誰がドリンクを用意するのだ。誰がボールを磨き、部室を掃除するのだ。

行かなければ。祐咲は立ち上がった。四日目の午後。丁度部活開始の時間に学校へ向かった。

第三話

ジャージに着替え、すぐにグラウンドへ向かう。

走りこみをする一年生。ノック練習をする二年生。今は十一月。三年生はもう引退している。しばらくその光景を眺めていた。

ドリンクを作った祐咲は部員たちに呼びかけた。

「みんなー！休憩しよ！」

グラウンドがざわめいた。

「安藤・・・お前・・・」

慎とバッテリーを組んでいた江崎主将が躊躇いがちに声をかけてきた。

「・・・大丈夫なのか？」

「ただの風邪ですよー。もう全然大丈夫です！ご心配かけてすみませんでした。」

満面の笑顔で祐咲は答えた。何も聞いてくれるかと祈りながら。

それを察したのかは分からないが、江崎は良かったなと言っただけで、それ以上何も言わなかった。

「おーし、十分間休憩！」

主将の声で立ち尽くしていた部員たちが集まり始めた。

祐咲は今まで通り、部員一人ひとりにドリンクを渡していく。お疲れ様と声をかけながら。

努めて明るく振舞った。気を遣われるのだけは嫌だった。

最後の一人にドリンクを渡したとき、祐咲の手元には一本余っていた。

野球部員は全部で二十五人。慎がいなくなった今は二十四人だ。祐咲はハツとした。以前と何も変わらず、明るく振舞っていたのに。こんなミスを犯してしまつてはその努力も台無しだ。

何も言えずにいた祐咲の手からいきなりドリンクが奪われた。

「ラッキー！俺めちやくちゃ喉渴いててさあ。一本じゃ足りなかつ

たんだ。余ってんなら貰うぜ。」

部のムードメーカーであり、慎の親友であった水野だ。

一気に場の空気が和んだ。

「お前はいじきたねえなあ。」

「先輩を目の前にして、礼儀がなくてねえぞ！」

いつもの野球部が戻ってきた。遠まわしな水野の優しいフォローに、祐咲は胸を撫で下ろした。

それと同時に、すっかりしりと自分に喝を入れた。

十分後、練習が再開され、監督と主将の指示でポジション別の練習が始まった。

いつも慎が立っていたマウンドの上には、控えの二年生投手が立っていて、江崎と投球練習をしていた。

慎の力強い投球を思い出し、涙が溢れそうになった。

慎はいない。どんなに会いたくても会えない。

(慎・・・慎・・・)

涙で目の前が霞む。

そんな姿を部員たちに見られなくて、そっと涙を拭いた。

そして、掃除をするために部室へ向かった。

部室の扉を開けると、予想通りの光景が広がっていた。

マネージャー不在だった三日間で、部室は随分と散らかっている。

空のペットボトルから、パンの袋。

タオルや雑誌まで。これでもかと言っくらい散らかっている。

「掃除くらいできないの、あいつらは」

呆れ気味に呟いた。

けれど、この部活に自分は必要な存在なのだと確信するのには十分だった。

第四話

丁寧部室を掃除する。

ふと顔を上げると、壁に貼ってある書が目に入った。

いつ誰が貼ったのかは知らないけれど、古いものだと思う。

紙が黄ばんでいる。

書と言っても、きっと過去野球部に所属していた誰かが書道の授業中に書いたものなのだろうけれど。

【目指せ甲子園！】

上手いとは言えないけれど、豪快で迫力のある字だ。

（そつえば、初めてこの部室に入ったとき、これ見て思ったんだ）
頑張ろうって。

決して自分がプレイする訳ではないけれど。少しでも選手たちの力になれるように。

（頑張ろう）

掃除を終えて、部室を後にする。

あと15分で部活終了。

冬のため、最終下校時刻が早いのだ。

「おーし！今日は終わりだ！」

監督の声がグラウンドに響き、部員が集まり始めた。

休憩のときと同じように、お疲れさまと声をかけながらドリンクとタオルを渡していく。

「冬の間は体づくりを中心に練習を組む。体力がない奴は走り込みをして体力増強を測ること。」

ハイ！と返事が揃う。

「うちの敏腕マネージャーも復活したことだしな。気合い入れていくぞ！」

監督がほほ笑みながらそう言葉を続けた。

「三日も無断で休んでごめんなさい。迷惑をかけて本当にすみませ

んでした！！」

祐咲は監督と部員たちに頭を下げた。

辛いのは、ずっと一緒に頑張ってきた彼らも同じハズだ。

けれど、三日も休んだ祐咲を誰も責めなかった。

監督ですら、部活の時間から来たことに対し、明日からはちゃんと朝から学校来いよと言っただけだった。

皆の優しさが嬉しかった。

「全くだ。この三日間、俺たちがどれだけ苦労したと思ってる？」

江崎が口を開いた。

「部室は汚い。連絡は上手く回らない。拳句の果てに水野が作ったドリンクは不味くて飲めたもんじゃなかったな。」

笑いが起こった。

皆が口々に、あれはヤバイだろ。塩だったよな。塩分の取りすぎで死ぬとこだった。

水野お手製ドリンクの批評が飛び交う。

ひでー、一生懸命作ったのに、と水野が喚いている。

「まあ、とにかく分かったことは、俺たちマネージャーがいなければ何も出来ないってことだ。」

なさけねーキャプテンだな。

ドリンクの作り方くらいは練習しとくべきだったな。

明るい笑い声が祐咲を包む。

泣きそうになりながら笑った。

部員たちが着替えてる間に部誌を書く。

祐咲がいなかった三日間は、主将の江崎が書いてくれたようだ。綺麗な字が綴ってある。

慎の死についても。

『俺たちは野球部のエースを。かけがえのない仲間を失った。』
と書かれていた。

（慎、皆が慎を必要としてくれてるよ）

第五話

皆が着替えおわって出てくると、江崎が部室に鍵をかけた。時間は五時半だが、空は薄暗い。

祐咲は江崎から鍵を受け取り、部誌を持ち、帰り支度を始めた。

「お疲れさまでしたー」

笑って部員を見送った。

暗くて、皆が気付かなかったことを願った。泣いて赤く腫れた目に祐咲が帰ろうと歩き出したとき、後ろから声をかけられた。

「安藤、待つて待つて！」

「水野？どうしたの？」

「送ってつてやるよ」

「え、何で」

今まで水野はこんなことを言ってきたことがない。

練習が延び、どんなに遅くなっても、終わると真っ先に帰ろうとしていた水野だ。

「女の子の夜道の一人歩きは危ねえじゃん？」

「今まで送ってくれたことなんてないじゃん。お前なら痴漢のが逃げてく、とか言って」

「あのなあ、せつかくこの俺が送ってやるって言うてんのに……」

「あはは、じゃあ、送らせてあげるよ」

「お前なあ！」

本当は分かっていた。水野は、親友の、慎の代わりをしようとしてくれていると。

今まで、部活の後は毎日慎と一緒に帰っていた。

真っ暗でも、慎が隣を歩いてくれていた。

でも、もう慎はいないから。

祐咲は一人で帰らなければいけないことになる。

そこで水野が祐咲を送って行くと聞いたのだ。

二人は校門を出、もう暗くなってしまった道を歩いた。

クラスのことや、面白い先生のこと。日にちが迫ってきたテストについて会話していたが、所々話が途切れる。

会話が不自然なことに、祐咲は気づいていた。

水野がクラスの友達のことを話し、また会話が途切れたとき。

「あのさあ、」

「慎、」

水野が何か言う前に祐咲が口を開いた。

水野がずっと慎のことを話したがっていたのを祐咲は分かっていた。祐咲を気遣ってなかなか口に出せなかったことも。

「慎ね、右腕を庇うようにして倒れてたんだって」

「！」

水野が息を呑んだ。

「覚えてたんだよ。ちゃんと」

あの約束を。

第六話

あの約束。

それは、夏の大会のときだった。

夏の甲子園を懸けた地区予選。

三年生の部員たちにとっては、最後の大会だった。

四回戦、祐咲たちの高校は優勝候補と謳われていた高校と当たった。先発したのは三年生の投手だった。

しかし、4回の攻撃中にデッドボールが当たり腕に怪我を負ってしまった。

そして5回から選手交代。慎がマウンドに立った。

エースナンバーを付けた一年生。一年生と言えども、慎の实力は本物だった。

後は頼んだ、と三年生投手は慎にたくした。

あいつなら、きっと抑えてくれる、と皆の期待が慎に集中した。

結果は・・・負けてしまった。

慎はよく頑張った。ストリートとカーブをよく操った。

けれど、相手強豪校の打線が、それを上回ったのだ。

三年生は肩を落とし、涙を流した。

マウンドにしゃがみ込んでしまった慎に、三年生投手がありがとう、と声をかけた。

目に涙を浮かべながら。

慎は、首を横に振り続けた。

試合終了後、慎は自分を責め続けた。

先輩は、自分に全てをたくしてくれた。任せてくれた。

その期待に応えられなかった。

先輩たちの野球を、終わらせてしまった。

悔しくて、自分が許せなかった。

一人ベンチに残り、右腕で壁を殴りつけた。渾身の力で。何度も、

何度も。

それを止めたのが、水野だった。血が滲み始めた慎の拳を止め、怒鳴りつけた。

「お前、ピッチャーの自覚あんのか！？ピッチャーが手え傷つけんじゃねえよ！」

投手にとつて、利き腕は命だ。慎は右利きだった。

その右腕を、慎は傷つけようとした。

先輩たちの期待に応えられなかった自分が許せなくて。情けなくて。

「お前が、こんなことして何になる！？ここで俺たちは負けた。甲子園には行けない。先輩たちはもう引退だ。」

でもなあ！お前が腕壊して、それで先輩たちが満足すると思うかよ！？

負けたけど、誰もお前のこと責めねえよ！頑張っただろ！？精一杯やっただろ！？見てりや分かるよ！

負けたことは責めない。でも、お前がここで腕壊したら、先輩たちも俺もお前を許さねえ。」

そのとき、慎の目から初めて涙が零れた。

「俺たちはまだ終わりじゃない。まだチャンスがある。お前は、これからまだまだ強くなれる。」

甲子園に行くんだ。お前が、全国で？！投手になるんだよ。それが、お前に全てをたくして任せてくれた、先輩たちへの恩返しだ。」

水野は慎の目を見て言った。水野の目も、涙で赤く滲んでいた。

慎は声を殺し泣いた。

自分には、先輩にありがとうなんて声をかけてもらえる資格なんてないと思った。

勝てなかったから。負けてしまったから。けれど、先輩はありがとうと言ってくれた。

抑え切れなかった慎を、一言も責めずにありがとうと言ってくれた。「分かったら、約束しろ。もう二度と腕や肩を、傷つけようとするな。お前はエースだ。俺たちの大黒柱なんだよ。」

反省はしても、後悔はしちゃ駄目なんだよ。

良いか？肩と、腕だけは、ぜってえ守れ。」

慎は、深く、力強く頷いた。

それが慎と水野の、約束だった。

もう二度と腕や肩を痛めつけるようなことはしない。甲子園に行くために。

第七話

「・・・」

水野は歯を食いしばって涙が溢れそうになるのを必死で耐えていた。慎は、バイクとぶつかったとき、とっさに腕を庇ったのだ。

恐らく、守るために。大切な右腕と、水野との約束を。

「馬鹿野郎・・・死んでも守れなんて、言ってねえぞ・・・！」

「バカだよ。ほんとバカ。野球バカ・・・」

「でも・・・、慎は、きつと後悔してないと思う。いっぱい遣り残したことはあるかもしれない。

それでも、慎は毎日を、今を一生懸命生きてたと思う。だから、きつと後悔なんてしてないよ。

ただの勘だけど、でも、ずーっと一緒にいた幼馴染の私が言うんだから、間違ってないと思う」

祐咲は、一言一言を噛み締めるように、言った。自分に言い聞かせるように。

後悔なんて、残したまま逝って欲しくなかった。

何の迷いもなく眠って欲しかった。

後悔なんてしてない。そう信じたかった。

もし、後悔しているとするならば、たった一つ。

「甲子園、かな・・・」

「・・・」

「・・・」

「行くよ。」

「え？」

「甲子園。絶対行く。あいつ、絶対見てくれるから。あいつが見てくれるなら、きつと行ける。」

皆で掴むんだ。絶対に掴んでみせる。一緒に行くんだ。慎も・・・一緒に」

「ありがとう・・・」

今日何回流したか分からない。

それでも、とどまることを知らないかのように祐咲の目からは涙が溢れた。

「だから、頼んだぜ、マネージャー。」

お前がいないと甲子園行っても、手作りのお守りを選手全員分作ってくれる奴がいなくなるからな。」

甲子園出場チームの女子マネージャーの定番を、水野は期待した。
水野らしい。

最後は笑わせてくれる。さすがは部のムードメーカーだ。

軽くて調子が良くて、真面目という言葉と正反対の水野と、いつも一生懸命で、絶対に練習や試合で手を抜かない努力の人の慎。

最初は、どうして二人が自他共に認める親友同士なのか分からなかった。

けれど、水野は、軽くて本当に調子だけは良いけれど、決して不真面目ではなかった。

いつも凄く楽しそうに練習に取り組み、試合でピンチに陥れば一番大声を出してベンチを盛り上げる。

誰かが落ち込んでいれば真っ先に気づく。水野はいつも、仲間のことをとてもよく見ている。

慎とタイプは違うけれど、一生懸命さと野球に対する情熱は同じなのかもしれない。

仲間を誰よりも大切にする水野だから、親友を失ったことは耐えられない程辛いだろう。

それでも、水野は挫けない。慎の夢を。皆の夢を。全員で叶えようと言ってくれた。

だから、笑った。

作り笑顔じゃなく。心から。きっと甲子園に行ける。慎も一緒に。「慎、痛かったのかな」

水野が呟いた。

「分からない。でも、苦しそうな顔はしてなかった。

きつと・・・慎にとってはデッドボールの方がずっと痛いんじゃないかな」

「そうだな。それが慎だ。」

いつの間にか祐咲の家の前まで来ていた。

水野にお礼を言つて、祐咲は家の中へと入った。

第七話（後書き）

ジャンルは「恋愛」なのに、なかなか恋愛要素が出てこない・・・

恋愛ストーリーを期待して読んで下さった方には本当に申し訳ありません。
私が今書きたいことに、まだ恋愛が出てこないのです。
わざとではなく、無理矢理恋愛の話の方向に持っていくことはしたくないので・・・という理由です。
この物語には、必ず恋愛要素も盛り込んでいきます。
それまで待っていていただければ、応援していただければ、嬉しいですよ。

第八話

一人になり、水野は泣いた。

慎の死を知り、幾度となく泣いた。

自らの半身を失ったような、酷く苦しい思いを抱えた。

けれど、水野は決して人前で涙を見せることはなかった。

通夜も葬式も、部員たちの前でも、泣かなかった。

一人になったときだけ声を枯らして泣いた。

通夜や葬式で、大声で泣き悲しむことを、慎が望んでいるとは思わなかった。

親友だから、分かる。

たとえこれが逆の立場だったとしても、慎もきつと人前で泣くことはないだろう。

それを自分が望まないから。

（泣いてる暇あんなら練習しろよって思うんだろうな・・・）
悲しんでいる時間があるなら練習する。

一步でも夢へ近づくために。

それが、遠い場所へ行ってしまった親友のためにしてやれること。
けれど、皆が水野のように強いわけではない。

野球部の一員を、共に汗や涙を流してきた仲間を、失った悲しみは部を暗く落ち込ませた。

このまま部は壊れてしまうんじゃないかと思うほどに。

練習が全く手につかず、落ち込んでいる部員たちに、江崎の激が飛んだ。

「お前らしい加減にしろ！落ち込んでたって慎は戻ってこねえんだよ！！」

ウジウジしてる奴はいらねえんだよ！慎の死を悲しむだけか？

慎はどんなときも練習を欠かさなかった！慎のために、頑張ろうって思えない奴は、

野球部を、辞める。」

辞めた者は、いなかった。

辞めるハズない。皆野球が好きで集まっているのだ。

ここで野球部を辞めたりすれば、それこそ慎は悲しむだろう。怒るだろう。

野球部は立ち直った。

安藤祐咲マネージャーが戻ってくるまでに、前の活気溢れた明るい野球部にしておこうと。

祐咲は必ず戻ってくると、皆確信していた。

彼女は、慎に負けず劣らず野球部が好きだから。

（さすがだよ、キャプテン）

主将の江崎の一声で、元の、慎が好きだった野球部が戻ってきた。

慎も水野も江崎を尊敬していた。

あんなに主将らしい人はいない。厳しく、怖いけれど、優しい人だ。

江崎の言葉には説得力がある。

江崎が勝てる、と言えば、どんなに不利な試合にも勝てる気がしてくるのだ。

主将の力は絶大ナリ。絶対行こうな、甲子園。

水野は夜空を見上げて祈った。

そこに慎がいることを信じて。笑って見ていてくれることを信じて。

秋季大会はもう負けてしまっているから、春の選抜には出られない。

目指すのは、来年の夏。江崎たちにとっては最後の夏となる。甲子

園へ行く。

必死で練習するつもりだった。

もう二度と負けないと、心に誓った。

第九話

翌日の朝、祐咲は多少緊張しながら教室のドアを開けた。

祐咲に生徒達の視線が集中する。一瞬ざわめき、すぐに水を打ったように静まった。

誰もがどう接するべきかと悩んでいることが、手に取るように分かった。

深く息を吸って、

「おはよう！」

大きな声でクラス中に響き渡るように言った。

出来る限り、明るく爽やかに聞こえるように。

「お、はよう。」

「おはよう・・・」

「やだなー！皆何でそんな暗い顔してんの？あ、慎のこと？あたしなら大丈夫だよお！？」

落ち込んでたって何も始まらないし！！平気、平気！四日も休んじゃってごめんねー？

あ、昨日は来てただけだよ。部活だけ」

努めて笑顔で、明るく。皆拍子抜けしたように立ち尽くした。

「ち、祐咲・・・ほんとに大丈夫・・・？」

同じクラスであり、大親友の恵が恐る恐る声をかけてきた。

「大丈夫だって！恵、ごめんね？メールも電話も返さなくてー」

恵はその明るすぎる態度に何か思ったようだったが、何も言わなかった。

良かった、心配したんだよ、と笑った。

ごめんねー、と笑顔で返す。

その様子を遠巻きに見ていたクラスメイトたちも、いつもの朝の日常に戻っていった。

「祐咲、もうすぐテストだって分かっているの？4日も授業受けてな

くて大丈夫？」

「・・・分かってるよ。大丈夫じゃないけど、ほら、そこは恵サンの素晴らしいノートを見せてもらおうと思って」

恵はのほほんとしていて、ぼけっとしているが、成績は学年三位という秀才なのだ。

「そう言うと思って。はい、ノートのコピー」

呆れた顔をして恵は祐咲に束になったコピーを渡した。

「さすが恵！！ありがとう！助かります！」

顔の前で両手を合わせて頭を下げた。恵が笑う。

周りの生徒も笑う。

今までと何も変わらない日常。祐咲も、クラスメイト達も、それを望んだ。

チャイムが鳴り、担任が教室に現れるとざわついていた教室は静まった。

担任の新堂は祐咲に気付くと、目だけで微笑んで言った。

「安藤、やっと来たのかー。全く、テスト前に休むなんてよほど自信があるんだな。期待してるぞ」

期待されても困る。今回のテストは、いつも以上に悪い自信ならあるが。

あはは、と渴いた声で苦笑した。

新堂は祐咲の欠席についてそれ以上触れなかった。テストの話をして終わりにしたのだ。

ここにも、優しい人がいる。

テストまであと十日だ。授業を受けていなかった分、本気でやらないと少々危ない。

けれど、部活が休みになるのは一週間前からだ。

恵に家庭教師を頼もうか、と考えたが止めた。

一度頼んで酷い目に合っている。恵は、勉強を教えるときは有り得ないほどスパルタなのだ。

強豪チームのコーチのように。女性だが。

とにかく、人格が変わる。少しでも間違えれば罵声が飛び、手をピシャンとやられる。

何年か前の学園ドラマに出てくる、竹刀をいつも持っていて生徒を脅すのが役柄、な教師のようだ。

だから恵には頼めない。成績がずば抜けて良い人は教え方が上手いとは限らないし。

うーん、と唸っているうちに一限目が始まった。英語だ。

祐咲は英語が得意だ。英語だけはいつもそれなりの点数がある。

幼い頃だが、慎と共に英会話教室へ通っていたのだ。それが楽しく、今でも英語は好きだ。

第十話

それから穏やかに毎日は過ぎて行き、何事もなくテスト最終日を迎えた。

「あと一教科！」

男子生徒がシャーペンを持って叫んだ。

最後のテストの休み時間。皆ラストスパートをかけ、教科書を開いている。

そんな中、祐咲の携帯電話がメールの着信を告げた。

「江崎先輩？」

主将の江崎からのメールだった。

“ 今日一時からミーティング。2 B 集合。一年に連絡頼むな”
分かりました、と返信しながら祐咲は内心がっかりしていた。

今日は部活休みの予定だったため、恵と買い物に行く約束をしていたのだ。

「めぐちゃん。ごめんなさい。今日のお買物、行けなくなっちゃった」
一年部員に連絡のメールを送ると、教科書を見ている恵に声をかけた。

「ん？部活？今日休みじゃなかったの？」

教科書から顔を上げ、問い掛けた。

「そのはずだったんだけど…今キャプテンから連絡入って。ミーティングやるみたい」

「ふーん。問題発生かねえ」

のんびりした口調で何げに怖いことを言わないで欲しい。

その問題によつてはマネージャーの仕事が増えるのだから。最後の教科は生物だった。

遣伝子がどうの、メンデルの法則がどうの、正直どうでも良い。

記号問題を勘に任せ、一応は最後のテストを終えた。

祐咲は窓際の席で、グラウンドに面しているため、自然と外を眺める

時間が多い。

テスト終了時刻までの十分間ほど、祐咲はグラウンドを眺めて過ごした。

サッカー部のコートの際に野球部は位置している。

少し土が盛り上がったところ。ピッチャーマウンド。

祐咲の心は、不思議なほど落ち着いていた。

慎が死んでしまったことを、諦めたわけでも吹っ切れたわけでもないけれど、慎の死を受け入れつつあるのかもしれない。

物思いに耽っていると、終了のチャイムが鳴った。

テストを教師に提出し、皆が騒ぎながら帰り支度を始めた。

祐咲も荷物をまとめ、ミーティングに向かうために教室を出た。

「恵、バイバイ！ごめんね！」

「今度埋め合わせしてよー」

分かったと笑い、隣の校舎に向かった。

2・Bの教室には、まだ三十分前なのにもう大分部員たちが集まっていた。

祐咲は水野たち一年生が座っている机に近寄り、声をかけた。

「おはよ。皆何でお昼ご飯持ってるの？ずるいー」

「購買で買ってきたんだよ。」

「っーか、おはようって時間じゃねーし」

冷たい突っ込み。芸能界じゃ、その日初めて会った人にはおはようございますって言うんだから。と言うと、お前芸能人じゃねーしと言われてしまった。

「安藤、昼持ってないの？これ食う？」

「えっ！ー！小島、良いの！？」

「良いよ。俺いっぱい買ったから」

目がクリクリした、小柄な少年。女の子にも見える可愛い顔立ちをした小島がニコツと笑って、サンドウィッチを差し出した。

「ありがとう、小島クン、天使に見えるよー！」

ははは、と小島が苦笑した。

「動物にエサを与えないでくださいーい」

水野が言うとどつと笑い声が起こった。小島まで笑っている。

水野にはしっかり裏拳を入れておいて、椅子に座りハムサンドを食べる。

そうこうしている内に時計は一時を示し、教室に監督と江崎が現れた。

監督の表情は明るい。祐咲はほっとした。

テスト最終日にミーティングということもあり、内心、部員の誰かがカンニングでもしてそれがばれ、部活停止処分になったんじゃない・と心配していたのだ。

だが、心なしか江崎の表情は暗い気がする。

第十一話

「よし、全員揃ってるな？テストお疲れさん。話はすぐ終わるからな。良い知らせだ。」

江崎も席に着くと、監督は笑顔で話し始めた。

「皆、青葉学園は知っているな？」

青葉学園。野球部の甲子園常連校だ。プロ野球選手も沢山輩出している。

今年の夏、甲子園の切符を手に入れたのも青葉学園だった。

「その青葉学園から、三学期に転入生がやってくる。」

一気にざわついた。

「静かにしろよ。野球部員だ。一年生の、河野一志」

ざわめきは先程とは比べ物にならないくらい大きくなった。

河野一志。青葉の一年生で唯一のベンチ入りを果たし、甲子園に出場した。

中学の頃から注目を集めていた選手だ。全国の強豪校からスカウトが来ていたと聞いた。

一年生にして、MAX142キロを出す・・・右腕投手。

「本人のたつての希望で、この成明高校への編入が決まった。野球部への入部を強く希望している。」

皆、河野に負けないように練習に励むこと。以上！」

それだけ言っと、監督は教室を出て行った。

誰も席を立とうとはせず、教室は静まり返っていた。

江崎は、監督から皆より先にこの話を聞いていたのだろう。全国でも指折りのピッチャーが入る。願ってもないことだ。甲子園が近くなる。喜ばしいことだ。

けれど誰も、喜びの声を上げない。

「慎は・・・」

誰かが呟いた。その一言に、祐咲は震えた。

慎。成明のピッチャーは、慎だ。他の誰でもない。成明のマウンドに立つのは、大野慎だけだ。

他の者をチームのエースとして迎えることができるのか？しなければいけないことは分かっていた。

けれど・・・

「皆、複雑なのは分かるが、事実だ。青葉の河野が俺たちの仲間になる。早く迎えろよ」

それだけ言つて、江崎も教室を後にした。

「何だよそれ・・・！慎の代わりなんて、快くなんて迎えられないかよー！」

水野の悲痛な叫びが、教室に響いた。「水野、落ち着けよ」

「落ち着いてられるかよ！お前らは平気なのかよ！？監督も監督だ。慎のこと忘れたみたい嬉しそうに話しやがって・・・！」

水野の目は一点を見つめたまま動かなかった。

「水野。止めとけ、言い過ぎだ。監督が慎を忘れるわけねえだろ。でも、前に進まなきゃいけないんだよ。」

新しいピッチャーが、しかも青葉の河野がくるんだ。良い機会なんだろ」

「・・・！」

先輩の言葉に、水野は悔しそうに唇を噛み締めた。

祐咲は初めて口を開いた。

声が震えそうになるのを必死で堪え、たった一言。

「がんばんなきゃ、ね」

第十二話

震える手足を懸命に支えて、祐咲は教室を出た。

頭の中は真っ白だった。少しでも気を緩ませれば泣き出してしまいそうだった。

今まで、控え投手だった先輩が投げていた。

きつと試合でも彼が正投手になるのだろうと思っていた。

けれど、違う。慎の1番を受け継ぐのは・・・違う学校からやって来る人。

天才と呼ばれる投手。

「どうして、うちに・・・」

そのまま青葉にいれば、エースは確実だっただろう。

甲子園で大活躍も出来ただろう。

何より、約一年一緒にプレーしてきた仲間たちと離れて、何故成明に来るのだろう。

（何か問題を起こしたんじゃない・・・）

悪い予感が祐咲の頭をよぎる。

高校野球はスポーツの中でも特に規則が厳しい。

何か問題が起これば、対外試合禁止、公式試合出場停止なんて当たり前だ。

もし、問題を起こして部活を退部になったような人だったら・・・そんな人が成明に来るのだとしたら・・・

仲間として、喜んで迎えたい。

甲子園を目指し、一緒に頑張りたい。

そうは思う。

けれど・・・

歓迎なんてできるのか。頑張ることができるのか。

水野に言った、がんばんなきゃ、は自分自身に向けられた言葉だった。

(慎、どうしよう・・・)

こんな時、慎なら何て言ったのだろう。

『ばーか。何悩んでる？野球部への入部を希望してるんだ。野球が好きなことに変わりはないだろう。野球が好きな奴なら、一緒に頑張れるさ』

そんなことを言うのだろうな、と祐咲は思った。

今、言つて欲しい、と心から願った。

決して叶うことはないけれど。

その日の夜、恵から電話があつた。

「どうだった？」

ミーティングが、だ。何だった？ではなく、どうだった？と聞くのが恵らしい。

「うん…何か、三学期から、転入生がくるって」

「へえ。野球部なの？」

「青葉の、ピッチャー。一年生」

「青葉って…あの、強いところ？」

「そう」

何で成明にくるんだろうねえ、と昼間祐咲が思ったことと同じことを呟いた。

「それで、暗くなってるんだ？大野君の次に立つのが、違う学校から来る凄い人だから？」

さすが、恵だ。

鋭い。いつも通りに、普通にしているつもりだったのに、恵はごまかせない。

「・・・大丈夫だよ。うちの野球部は、皆凄く仲良しでチームワークがめっちゃ良いのが売りでしょう？」

恵の言う通り、成明の野球部はとても仲が良い。

「だから、その青葉の人もすぐに明成の野球部員に、仲間になるよ。もし天狗になつて、馴染もうとしないような人なら、皆が受け入れない。そんな人にエースナンバーを任せたりしない。」

大丈夫。あんたの仲間を信じなよ」

恵の言葉には、説得力がある。頭が良いからかな。話にちゃんと筋が通っている。

「・・・うん、分かった。ありがとう」

第十二話（後書き）

12話です。
読んでくださってる方、遅くなってしまうて
申し訳ありません・・・
もうすぐ豪腕投手が登場します。

これからも応援お願いいたします。

第十二話（前書き）

L H R 〓 ロングホームルーム

第十三話

一カ月後。

とうとう三学期が始まった。

冬休みは、年末年始以外はほぼ毎日練習だった。

クリスマスには部員の皆で遊び、お正月には皆で初詣に行った。願うことは、きつと全員同じ。

【甲子園に行きたい】きつと。

部の結束が今まで以上に固くなった二週間だった。

始業式の朝、祐咲は恵と待ち合わせをして学校に向かった。

「寒いねえ・・・ほら、昨日の雪がまだ残ってるよ」

恵が指差した公園には、小さな雪だるまがいた。

「可愛いね」

クスリと笑うと、何だか胸が温かくなった。

「きんちちょーする？」

わざと平仮名で、からかうように恵が言った。

「そりゃ、少しはね。でも、やっぱり嬉しいよ。速球派の豪腕投手が入るんだもん。皆もやる気になってるし」

本当だった。複雑な気持ちが全く無くなったと言えば嘘になるけれど、冬休みの練習は、明らかに部員のやる気が違った。

河野一志の存在が、皆のやる気に火をつけたのだ。

成明野球部は、この冬、強くなった。監督はこれが狙いだっただのかもしれない。

ただ、水野だけは違った。

皆が今日やってくる一年生投手の存在を意識しているのにも関わらず、水野だけは変わらず淡々と練習メニューをこなしていた。

河野の話題が持ち上がったても、水野は決して交ざろうとしなかった。水野はまだ、マウンドの上に慎を見ていた。

始業式が終わったあと、教室でのLHR。

三学期の予定表が配られ、先生の説明が続く。

河野一志はこのクラスに来たのだろう。

少なくとも、祐咲のクラスではなかった。

11時に解散となる。

その後野球部はミーティングが計画されていた。

河野のお披露目会だ。

廊下に出ると、隣のクラスが騒がしい。人だかりができています。

転入生、という言葉がざわめきの中から漏れ聞こえた。

「！」

祐咲の隣のクラス、1-Dは、水野のクラスだ。

よりもよって、水野のクラスに、河野一志はやって来た・・・

祐咲が呆然としてみると、D組の生徒たちが帰り支度をし、廊下へ出てきた。

一番最後に、水野は教室を後にした。水野の隣には、背の高い男子が立っている。

（河野一志・・・）

すぐに分かった。オーラが、ある。明らかに人とは違う。

180cmは優に超えているであろう長身と、長い手足。

冷たそうな印象があるが、人を惹きつける力のある瞳。

「安藤、」

思わず河野に見入ってしまった祐咲は、水野の声で我に返った。

「ミーティング、2-Bだよな？」

祐咲が頷くと、水野は河野を一瞥し、

「おい、行くぞ」

水野のものだと信じられない程に冷たい声で言った。

河野は何も言わず、水野の後について2-Bに向かった。

祐咲も二人から少し離れて歩いた。

廊下ですれ違う生徒のほとんどが河野を振り返る。
男子も女子も。

好奇の視線と、河野のオーラに惹きつけられて。

第十四話（前書き）

とても長い間連載をストップさせていました。

未だに読んで下さっている方がいるかは分かりませんが、もし待っていてくれた方、本当に申し訳ありません。そしてありがとうございます。

丁度高校野球の季節ですし、頑張って書いていこうと思います。
読んで下さったら、嬉しいです。

第十四話

2・Bの扉を開け中に入ると、もうほとんどの部員が集まっていた。皆一斉に河野を見つめ、ざわついていた教室が静まり返る。

「おお、来たか。じゃあ、全員揃うまでお前はここに座ってる」

監督が、6列並ぶ机の一番前の席を指して言った。

河野ははい、と小さくも無く大きくも無い声で返事をした。よく通りそうな低い良い声だ。

教室は静まり返ったまま、誰も何も言わない。

それが返って空気を重くしていた。

水野は一番後ろの席に着き、河野を見ようとしなない。

「水野、大丈夫か？」

水野の隣に座っている小島が小声で声をかけた。

「何が」

小島の方を見ようともせず、机の一点を見つめたまま水野は答えた。

「何がって・・・」

小島は口ごもってしまった。河野と上手くやれそうか、チームメイトとして認めてやれそうか、そう尋ねたかったのだが、言えなかった。

水野の態度が言わせなかった。

緊迫した空気を破るように監督の明るい声が飛んだ。

「よし、全員揃ったな！？俺たちの新しい仲間の紹介だ。河野！」

監督に呼ばれ、河野が教壇の前に立った。

改めて見ると、やはり凄い存在感だ。風格というものが、ある気がする。

「河野一志。ポジションはピッチャーです。どうぞよろしくお願いします。」

口調は丁寧だが、何だか心が籠っていない・・・と祐咲は感じた。ただの妬みだろうか。監督には普通に聞こえたようだ。

「今日は顔合わせだけだから、河野を入れての練習は明日から始める。皆、気合入れて来いよ！」

監督が教室を後にしても、誰も立ち上がろうとしない。怖いほどに空気が張り詰めている。

一番前の席に黙って座り外を眺めていた河野に、最初に声をかけたのは意外にも小島だった。

「・・・の。こうの！」

「・・・え？」

「え？じゃないよ！よろしくって言ってんの！俺、A組の小島勇太！ポジションはファースト！」

もう一度よろしくな、と言って小島はニコツと笑った。

「ああ・・・よろしく。」

緊張してるのか、元々無口な性格なのか・・・。

河野は言葉少なでニコリともしなかった。

小島がきっかけとなり、主将の江崎が自己紹介を提案した。

一人ずつ、名前とクラスとポジション、そして一言を言っていく。

よろしくと言う者が多かったが、中には趣味や好きなタレントの名前を出す者もいた。

和やかなムードのまま水野の番になった。

「水野亮。D組。キャッチャー。」

それだけだった。一瞬だけ冷たい空気が流れたが、自己紹介はそのまま進んでいった。

今年は正捕手は江崎だろうから、河野とバッテリーを組むのは江崎だが、投球練習はもちろん控え捕手もする。

江崎が出られない場合は水野が出ることもあるだろう。

大丈夫なのだろうか、と祐咲の胸は不安でいっぱいだった。

そうこうしている内に、自己紹介は全員回り、最後に祐咲の番となった。

「1年C組、安藤祐咲です。マネージャーなので、雑用は何でも言いつけて下さい。よろしくお願いします。」

言い終わって座ろうとしたとき、河野が口を開いた。

「・・・あんたが、マネージャー？」

祐咲は突然のことに驚きながらも答えた。

「え、うん、そうだよ。分からないことがあったら何でも聞いてね。」

ふーんと言って祐咲を見た。だがすぐに興味を無くしたかのように河野は顔を逸らした。

「悪いけど、用事あるんで帰ります。」

河野は江崎にそう告げると、荷物を掴み教室を出て行ってしまった。全員、呆気にとられたかのように静まり返った。

「な、何というか・・・マイペースな奴だな・・・」

江崎が言くと、水野が口を挟んだ。

「つか、感じ悪すぎっすよ。」

余りにも冷たい口調に江崎も驚いたようだが、すぐに冷静に水野を諭した。

「お前な、気持ちは分かるけど、クラスメートだろ？来年はお前が河野とバッテリーを組むんだ。そんなんでどうする。」

「俺は、あんな奴とバッテリーなんて組みませんよ。あんな偉そうな奴の球なんて取りません。どーせリードにも首振ってばっかじゃないすかね。」

「水野、いい加減にしとけよ。」

有無を言わせぬ江崎の口調に、水野も黙った。

「・・・俺も、今日は帰ります。」

そう言って水野も教室を出て行った。

江崎はため息をついて、祐咲に言った。

「安藤、頼む。」

祐咲ははい、と頷くと荷物を持って水野の後を追った。

第十五話

1階の下駄箱で水野に追いついた。

「水野！待ってよ！送ってくれるんじゃないの？」

「はあ？まだ明るいだよ。」

「良いじゃない。途中まで一緒に帰ろう。」

祐咲はそう言って水野の隣に並んだ。水野は黙ったままだ。

「水野。感じ悪いよ。」

祐咲はハッキリと言った。

「お前が勝手に付いて来たんだろ！？」

「違うよ。さっきの自己紹介。あんな言い方じゃみんなの雰囲気まで悪くなるでしょ。」

水野は何も言わない。

「嘘でも、よろしくぐらい言うべきよ。江崎先輩の言う通り。これから大丈夫なの？」

この後、水野の口から思いがけない言葉が飛び出した。

「俺、野球部辞めるから。」

祐咲の頭は真っ白になった。

河野の悪口は出ても、まさか辞めるなんて言葉が飛び出すとは思わなかった。

「・・・何、言ってるの？」

「本気だから。あんな奴がいる野球部なんて、やってらんねえよ。」

水野は、冷たい目をしていた。

「ちよつと待ってよ！甲子園行ってくて言っただじゃない！憤が見てくれるから、絶対一緒に行くんだって言っただじゃない！」

「その憤を！・・・憤の死をあいっは・・・残念だったなって吐き捨てたんだ！」

祐咲を睨み付けたその瞳には、怒りの色が宿っていた。

教室で、水野は河野から

「ここのエースだった奴って事故で死んだんだろ？」

と聞かれたらしい。

そうだと答えると、河野は全く表情も変えず、たった一言残念だったなと言っただけだった。

「慎の死を、そんな一言で片付けられて！黙ってられるかよ！あんな奴と野球なんて出来るかよ！

甲子園なんて、目指せるかよ・・・！」

祐咲は、何も言えなかった。

ただ黙って立ち尽くしていた。

「辞めるから。」

もう一度言って、水野は祐咲を残しその場を立ち去った。

どうして。

どうして辞めるの。

どうして河野はそんなことを言ったの。

どうして水野は、頑張ろうぜって言わないの・・・

ねえ慎、どうしよう。

水野が辞めちゃうよ。

あんなに野球が大好きだった水野が、慎の親友が、辞めちゃうよ。けどあたしには、止めることが出来ない。

あんな悲しい目をした水野を、止めることなんて出来ないよ。

どうしよう、慎・・・

その日の夜、祐咲は江崎に電話をした。

水野のフォローが出来なかったことを詫びて、辞めると言ったことを伝えた。

「・・・そうか。」

「あの、キャプテン・・・」

「分かってる。あいつに辞められたらみんなが困る。大丈夫だ。辞めさせたりしない。」

祐咲は幾分かほっとして電話を切った。

けれど、あの水野の瞳は・・・決心が固いことを物語っていた。

水野が腹を立てるのは、よく分かる。

祐咲だって慎の死を残念だったで片付けられたら、黙ってなどいられない。

別に泣いて悲しんで欲しい訳じゃないが、みんなに愛されていた大野慎という偉大なエースに、興味を持って欲しい。

勝手な言い分かもしれないけれど、祐咲はそう思わずにはいられなかった。

きつと、水野もそうだったのだろう。

どんな投手だったと聞かれれば、彼はきつと惜しむことなく慎について熱く語ったであろうから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1020a/>

マウンド。

2010年12月21日15時02分発行